語り継がれる『アンクル・トムの小屋』——地下鉄道と『ビラヴィド』と

加藤光男

1、*Uncle Tom's Cabin* と逃亡奴隷法
2、クエーカー教徒
3、Underground Railroad の広がり
4、Levi Coffin の働き
5、*Uncle Tom's Cabin* と Toni Morrison の *Beloved*

はじめに

ストウ夫人（Harriet Beecher Stowe 1811-1896）の『アンクル・トムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin* 1852）ほどアメリカの歴史に大きな影響を与えた作品はないであろう。ストウ夫人は、奴隷制度による厭うべき極限状態をキリスト教的倫理観から描いた。言われるように、彼女は緻密な小説家ではなかったかもしれないが、すくなくともそこに描かれた事実の重さは、一切のそのような批評も越えるものがある。そして、彼女の献身により、奴隷制度はもはやアメリカには存在しない。しかし、人種偏見、摩擦、軋轢は150年余を経た現在でも、解決のできない大きな問題としてくすぶりつづけている。

この人種問題という重いテーマを正面から取り扱ったトニ・モリスン（Toni Morrison 1931-）がノーベル文学賞を受賞したのは1993年のことである。鉄鋼の町オハイオ州ロレイン（Lorain）の黒人社会に生れたという環境が、「地下鉄道」（underground railroad）によりカナダに逃げる逃亡奴隷の歴史と重なって、彼女に生涯のテーマを与えたことは想像に難くない。とくに、『ビラヴィド』（*Beloved* 1987）のセス（Sethe）——自分と同じ苦しみを味わうことがないよう

に、とわが子を殺した母親――の苦悩は読む者にそれ以上ページを繰る勇気を挫いてしまう。しかし、そこに描かれているのは、まさしく150年前にストウ夫人が描いていた世界である。『アンクル・トムの小屋』でも上の子二人を取り上げられ、次の子をその子のために良かれと自分で殺してしまった逃亡奴隷の母親キャシーが描かれている。そして、両作品とも舞台は「地下鉄道」が縦横に走るオハイオ州のシンシナティである。この二人の作家、奴隷制度を作り維持した加害者である白人に属するストウ夫人と、被害者である黒人側のトニ・モリスンの描く世界を比較考察する。

その際に、重要な背景として両作品をつなぐ「親切なクエーカー教徒」と「地下鉄道」に焦点をあてる。とくに、リーバイ・コフィン(Levi Coffin 1798-1877)という「地下鉄道」の社長(President)と称されているクエーカー教徒に注目する。彼はインディアナ州ニューポート(Newport、1878年にファウンテンシティー、Fountain City と町名が変更になっている)に「駅」を持ち、後年はオハイオ州シンシナティで商売をしながら、3,100人以上の黒人をカナダに逃がしたと言われている。

『リーバイ・コフィンの回想録』(*Reminiscences of Levi Coffin*)[1]と、『ストウ夫人の生涯――その手紙と日記による伝記』(*Life of Harriet Beecher Stowe: Completed from Her Letters and Journals*)[2]を主な手がかりとして、彼らの人生を辿ることで作品の背景を探り、作品鑑賞の幅を広げる一助としたい。

1、*Uncle Tom's Cabin* と逃亡奴隷法

ストウ夫人が『アンクル・トムの小屋』(1852)を書くにいたった直接の動機は1850年の「逃亡奴隷法」(The Fugitive Slave Law)の制定だと言われている。ストウ夫人の息子のトムが『ストウ夫人の生涯――その手紙と日記による伝記』のなかで語った話によると、1850年5月に、メイン州ブランズウィック(Blunswick)に転居したストウ夫人のもとに、兄エドワード・ビーチャー牧師

夫人が、逃亡奴隷法の強行によって起こったさまざまなひどい事件のことを書き送ったという。

そのうちの一通には次のように書かれていた。「ねえ、ハティ、もし、私があなたほど筆がたったら、国中の人みんなが奴隷制は呪うべきものだって思わせるようなものを書きます」（“Now Hattie, if I could use a pen as you can, I would write something that would make this whole nation feel what an accursed thing slavery is.”）（145）このときのことをよく覚えている家族によると、みんなに手紙を読んでやっていたストウ夫人はここまでくると、「椅子から立ち上がり、手紙を手の中でもみくちゃにして、子供の心に焼き付いて忘れることがなかった表情で、『書きます。生きているかぎり、きっと書きます』」（“Mrs. Stowe rose up from her chair, crushing the letter in her hand, and with an expression on her face that stamped itself on the mind of her child, and said: ‘I will write something. I will if I live.’”）（145）と言った、ということである。これが事実上『アンクル・トムの小屋』を書き始める発端であったようである。そして、1851年4月にNational Era社に第1章が送られ、翌52年4月1日まで連載の形で出版されることになった。この引用に表れているストウ夫人の激情がこの歴史を動かした著作を完成させたのであろう。まず、執筆に至る軌跡を辿る。

彼女は「典型的なニュー・イングランドの町」であるコネチカット州リッチフィールド（Litchfield）に生まれ、黒人奴隷とは縁のない環境に育っている。父親が会衆派の牧師であり、やがて結婚する夫も、さらに妹の夫も牧師という家庭環境であり、六人兄弟は全員が聖職についている。

ハリエット（ストウ夫人であるが、結婚前なのでこう表記する）は父親がレイン神学校の校長になったので、川一つ隔てて奴隷州ケンタッキーに境を接しているオハイオ州、シンシナティーに移り、21歳から39歳までの18年間（1832-1850）を過ごした。1833年には姉のキャサリンと西部女学校（Western Female Institute）を創立する。

奴隷制度に対して、キリスト教の熱心な信者であるハリエットは、当然、キ

リスト教的倫理観で心情的に反対してはいたが、このようにシンシナティーに住むようになってから、否応なしに関心を持たざるを得なくなったようである。彼女が直接南部の黒人奴隷と接したのは、1833年西部女学校の同僚教師ミス・ダットンと共にシンシナティーから川を渡ってケンタッキーに旅したときであった。『アンクル・トムの小屋』のシェルビー農場の舞台となった土地を訪れたとき、ハリエットはあまり関心のある様子ではかったようだが、小説の中ではその様子がしっかりと描写されていることに、ダットンが驚いたと『ストウ夫人の生涯』に記されている（Charles 71-72)。

ハリエットがカルビン・ストウ（Calvin Stowe）と結婚した1836年頃のシンシナティーは奴隷制度が問題化していたし、父親のレイン神学校は奴隷制度廃止運動の温床になっていた。しかし、彼女は奴隷制度に反対はしていても、公然とした廃止論者というほどではなかった。1837年の弟ウイリアムに宛てたストウ夫人の手紙が残っている。

> ここの善良な市民の約半数は奴隷制度廃止論者です。……
>
> 私はどちらにも偏らない中間層が絶対に必要だと思います。そうでないと、啓蒙が進むにつれて奴隷制度廃止団体の過激な行動は、情の深い良心的な人まで、その過激な行動に引きずり込んでしまうと思うからです。
>
> この問題に目覚めている人たちを満足させるなにかがシンシナティにあるでしょうか？　奴隷制度の問題にぶつかれば、誰でも必ず、なにかしなければという欲望に駆られます。しかし一体何をすればよいのでしょうか？
>
> The good people here, you know, are about half abolitionists....
>
> It does seem to me that there needs to be an intermedate society. If not, as light increases, all the excesses of the abolition party will not prevent humane and conscientious men from joining it.
>
> Pray what is there in Cincinnati to satisfy one whose mind is awakened on this subject? No one can have the system of slavery

brought before him without an irrepressible desire to do something, and what there to be done? (Charles 87-88)

この手紙を書いた1837年当時、ストウ夫人には解放運動が過激であると映っていたこと、また「一体何をすればよいのでしょうか？」と書いているように、個人的には関心が高いとは言えなかったようである。また、奴隷制度の廃止は自然の成り行きであったので、廃止運動もキリスト教的中庸が大切だと考えるのは当然のことだったのであろう。

1839年にストウ夫人の家では黒人娘を召使いとして家庭に入れたのだが、これが大きな事件に発展した。その娘は女主人に連れられてオハイオ州に住すむようになったが、女主人が死に、オハイオ州法により彼女は自由の身分になっていた。しかし、その娘がストウ家に来て数カ月たった頃、ストウ教授は次のようなことを聞き及んだ。死んだ女主人の夫が町にいて、その黒人娘を捜しており気をつけないと娘は捕まって奴隷に戻される、というものであった。チャールズ・E・ストウは次のように記している。

教授は娘を安全な場所に移して、捜索が打ち切られるまで、そこにとどまらせることにきめた。彼は義弟ヘンリー・ウォード・ビーチャーと共に、武器を携えて、夜になってからその娘を幌馬車に乗せて、人通りの少ない道を通って、12マイルほど田舎にいる娘の友人、ジョン・バン・ザント翁の家に連れていき安全にかくまってもらった。

Professor Stowe determined to remove the girl to some place of security where she might remain until the search for her should be given up. Accordingly he and his brother-in-law, Henry Ward Beecher, both armed, drove the fugitive, in a covered wagon, at night, by unfrequented roads, twelve miles back into the country, and left her in safety with the family of old John Van Zandt, the fugitive's friend. (93)

これはまさに、逃亡奴隷をかくまい逃がす地下鉄道の役割であった。その後

もストウ夫人の家では逃亡者の手伝い、自由になった黒人に対する援助をひんぱんに行っていたようである。

当時、奴隷制度廃止は世界的傾向であった。イギリス領西インド諸島では1833年に奴隷制度を廃止していた。アメリカ国内でも奴隷制度反対協会が1833年に設立されている、しかし、奴隷制度、貿易もますます栄えていた（荒このみ36)。このような情勢のなかで、逃亡奴隷法ができたのである。

逃亡奴隷法とは奴隷が北部に首尾良く逃げ切れても、南部の奴隷所有者の追跡によって発見されると、かくまっていた白人はただちにその逃亡者を南部に返さなければならず、それを怠るとその人が罰されるのである。心ある北部人はそれまでは奴隷制度に反対を唱え、救いの手をさしのべていれば良かった。しかし、いくら奴隷制度反対論者であると宣言したとしても、この法律によって奴隷を元の所有者に返すとなると、結果的には奴隷制度に荷担することになってしまい、賛成論者と何ら変わることがなくなったのである。

しかし、憲法の精神が、正義心、信仰心に支えられ生きていた建国間もない当時のアメリカでは、結局この無謀な逃亡奴隷法は、さまざまな人たちの反対に出会い、生まれたとたんに廃止の運命にあったのである。地下鉄道をはじめとする、奴隷制度廃止論者たち、特に宗教者たちは逃亡奴隷をカナダに逃す、あるいはかくまうなど、人智を尽くした援助を行った。さらに政界では南部に対する巻き返しもあり、やがて南北戦争へと突入していくことになったのである。

超絶主義を掲げて、アメリカの思想界を一方でリードしていたエマソン(Ralph Waldo Emerson 1803-82）も逃亡奴隷法に反対する一人であり、当然ながら「市民としての反抗」（“Civil Disobedience” 1849）で奴隷制度を非難していたソロー（Henry David Thoreau 1817-62）も声を上げた。

エマソンは1851年5月3日「逃亡奴隷法について」（“The Fugitive Slave Law”）という演題でコンコード市民に説いている。「誰もが自尊心を失うことも、紳士の名を汚すこともなく、従ったり、賛助したりすることができない法律ができた」（“You have a law which no man can obey, or abet the obeying,

without loss of self-respect and forfeiture of the name of gentleman.”) (198) と、この法案に賛成した彼の友人であるダニエル・ウエブスター (Daniel Webster) について、激しい非難を浴びせた。そして、ウエブスターがこの法案の賛成演説をしてから 4 年目にあたる 1954 年 3 月 7 日、エマソンはニュー・ヨークにおいて、ふたたび同じ演題でウエブスターの非を説いている。

また、ソローは身体の弱った晩年、奴隷制度反対の著作、演説に全精力を傾けたかの感がある。1854 年、反奴隷制新聞『リベレイター』(*Liberator*) の 7 月 21 日号に発表した「マサチューセッツにおける奴隷制度」(“Slavery in Massachusetts”) の中で、ソローは憲法よりは神の法に従うべきこと、そして奴隷所有を許したり、逃亡奴隷法に従うようなマサチューセッツ州や州人は精神的に奴隷の状態になっていることを説いている。また、1859 年にはキャプテン・ジョン・ブラウンの反乱と処刑があり、「キャプテン・ジョン・ブラウンのために弁ず」(“A Plea for Captain John Brown”) は同じ思想につらぬかれている。

これら逃亡奴隷法に反対する激情は、『アンクル・トムの小屋』の連載と時を同じくしている大きなうねりの中にあるものであった。しかし、彼ら解放論者が演説をしなければならないほど、法案を通した側の力も大きかったのは当然である。これについては後の章で述べる。

2、クエーカー教徒

このような環境の中で『アンクル・トムの小屋』は書かれることになったのである。先に書いたように、ストウ夫人は決して奴隷制度廃止論者として活躍していたわけではないが、奴隷について多くのことを見聞きしていたはずである。そして、自分も元奴隷である黒人雇い人を逃がすことさえもやっているのであるから、「地下鉄道」については当然知っていたし、これから取り上げる「親切なクエーカー教徒」についても多くのことを知っていた。キリスト教の、正式にはフレンド派 (Society of Friends) と称されるクエーカー教徒は教団とし

ても個人としても、博愛を掲げ常に逃亡奴隷にも、自由になった黒人にも温かい手をさしのべていた。

逃亡奴隷法が施行されてからのストウ夫人の変化を示す手紙 ── 自らも逃亡奴隷であり、奴隷解放に力を尽くしていたフレデリック・ダグラス宛 ── が残っている。ブランズウィックから 1851 年 7 月 9 日に出している。これは教会が奴隷制度に賛成している、という彼の新聞記事に反論するものであった。

> 私と夫はこの 17 年間、ある奴隷州との境界に住んでいましたが、逃亡奴隷をひるむことなく、全力で助けて参りました。解放された奴隷の子供たちを私の家の学校に入れ、自分の子供たちと一緒に教えて参りました。このようなことを私共がするようになりましたのは、教会のなか、祭壇の前で見出したことによる影響であます。
>
> As for myself and husband, we have for the last senventeen years lived on the border of a slave State, and we have nerver shrunk from the fugitives, and we have helped them with all we had to give. I have received the children of liberated slaves into a family school, and taught them with my own children, and it has been the influence that we found in the church and by the altar that has made us do all this. (Charles 152)

ストウ夫人たちがどの程度のことをやったのかは不明であるが、逃亡奴隷を逃がす手伝いに手を貸していたことははっきりと本人の口から語られている。

また、『アンクル・トムの小屋』の最終章第 45 章「結びの言葉」は小説の形を崩してまでも、小説に描かれていることが真実であることの説明に費やしている。これは、この作品がもともと *National Era* 誌に 1851 年 6 月 5 日から 52 年 4 月 1 日まで 44 回にわたって連載されたものであり、本の形で出版される前から、多くの読者の反応があったからなのである。さらに、ストウ夫人は 1854 年に『アンクル・トムの小屋の鍵』(*The Key to* Uncle Tom's Cabin) を出版して、登場人物のモデルになった人物を記すなど細かな説明を書き、奴隷の実状や奴隷制度の意義を正しく描いていない、というようなさまざまな誹謗中傷

に対処した。

その第13章「クエーカー教徒」（“The Quakers”）では『アンクル・トムの小屋』でエライザが世話になるクエーカーたちのモデルが描かれている（*Key* 98-108）。それによると、

> 著者はこの人物の特徴を描写するにあたって個人的な観察を元にしている。オハイオ州にはクエーカー入植地がいくつかあって、ストウ夫人の本に描かれている暮らしぶり、気質、生活習慣は決して誇張されたものではない。
>
> いつもクエーカーの入植地は、弾圧されたり法を犯した奴隷の避難所になっていた。ラクエル・ハリデーという登場人物は実在であるが、彼女は褒美として神に召された。神と人への愛のために、静かに罰金と牢獄の危険をおかしたシメオン・ハリデーには、この地のクエーカーのなかによく似た人が大勢いた。
>
> The writer's sketch of the character of this people has been drawn from personal observation. There are several settlements of these people in Ohio; and the manner of living, the tone of sentiment, and the habits of life, as represented in her book are not at all exaggerated.
>
> These settlements have always been refuges for the oppressed and outlawed slave. The character of Rachel Halliday was a real one, but she has passed away to her reward. Simeon Halliday, calmly risking fine and imprisonment for his love to God and man, has had in this country many counterparts among the sect. (98)

ここではクエーカー教徒の実名は出てこない。しかし、『アンクル・トムの小屋』の最終章第45章にはシンシナティのある若い紳士が、少年の頃から面倒を見ていた黒人召使いに逃げられた話が書かれている。その召使いはあるクエーカーのもとへと逃げたこと、そして、そのクエーカーは「奴隷を逃がすことにかけては有名だった」（“a Quaker, who was quite noted in affairs of this

kind") (543) と説明されている。しかし、まだまだ南部からの追手がかかる頃であり危険であったのであろうか、実名が明かされることはない。

作品を読んでいて安堵感をおぼえる場面は 13 章「クエーカー教徒の入植地」であり、ここで、エライザは追手を逃れ、シメオンの助けを借りて地下鉄道でカナダに行くのである。行く先はオハイオ州のミシガン湖畔の町サンダスキーである。そこから船でカナダにわたると描かれる。シンシナティーはカナダへの地下鉄道の拠点であり、実際サンダスキーを経由するこのルートも地下鉄道の本線であった。

3、Underground Railroad の広がり

地下鉄道の広がりは予想をはるかに超えるものである。当然のことながらあの広い中西部の自然に彼らの本線支線が張り巡らされていたのだから、追手がそれを見つけだす困難は想像がつく。それは逃亡奴隷たちと逃がす人たちの人智を尽くした決死の行動なのであるから、当然のことである。

これについては、「地下鉄道」カナダへの道、逃亡奴隷の旅行線路図("'Underground' Routes to Canada, Showing the Lines of Travel of Fugitive Slave") という詳細な地図が『地下鉄道 —— 奴隷から自由へ』(*The Underground Railroad: From Slavery to Freedom*) に載っている。これはウイルバー・H・シーバート (Wilbur H. Siebert 1866-1961) オハイオ州立大学教授の 1891 年から 6 年間にわたる緻密な調査・研究の 358 頁、付録 71 頁の労作で、このテーマではこれ以上のものはないであろう。その「付録E：地下鉄道協力者、奉仕委員会の会員の名簿」(Appendix E: Directory of the Names of Underground Railroad Operators and Members of Vigilance Committees) には 37 頁にわたり地下鉄道に携わった人たちの名前が記されている。しかし、名前を明かしていない人はこれよりもっと多いであろう。ここに記された人数からだけでも、地下鉄道は自由州、奴隷州を問わず心ある人たちの壮大な命がけの仕事であったことが、よく伝わってくる。地図はイリノイ州、インディアナ州、オハイオ

州、ペンシルバニア州、マサチューセッツ州などから以北にはびっしりと「線路」が書き込まれている。

これを使って逃げおおせた奴隷は、オハイオ州だけで約4～5万人と言われている。奴隷は購入した財産と考えられていたので、南部奴隷所有者の損害は当時約三千万ドルと推定されている（E. Delorus Preston Jr. “Ohio” 412）。さらに、奴隷がいつ消えるかもしれない状況では、逃亡の意志のない奴隷の価値も不確かなものにしたといわれる。奴隷所有者にとって、奴隷制度を守るためにも、逃亡奴隷を取り戻すのは必須のことであり、逃亡をほう助する地下鉄道は「敵」であった。

> このような南部の奴隷所有者が地下鉄道の運行に感じていた嫌悪感と制御できない怒りは、あまりにも明白で、これ以上述べる必要はない。彼らは奴隷という財産にたいする紛れもない権利を信じ、この権利を法的手段を経ないで奪う人々の組織的努力を悪漢か泥棒の仕業と見なしていた。
>
> That these Southern slave holders regarded with disgust and uncontrollable rage the operations the Underground Railroad is too obvious for extensive comment. They believed they had definite rights to their human property, and they regarded the systematic efforts of those who would deprive them of this right without due process of law as rascals and thieves. (Edward F. Arnold 413)

このようなこともあり、シーバートが次のように述べて、『地下鉄道 ── 奴隷から自由へ』を締めくくっているのも、よく頷ける。「これらすべてを見た今、地下鉄道は南北戦争をもたらし、奴隷制度を打ち破る最も大きな力の一つであった、といって過言ではない」（“In view of all this it is safe to say that the Underground Railroad was one of the greatest forces which brought on the Civil War, and thus destroyed slavery.”）（358）この言葉が地下鉄道の役割のすべてを語っている。

地下鉄道の歴史は古い。南部のプランテーションが奴隷を導入するのは1619

年のことであった。それとともに逃亡の歴史は始まり、約百年が経過して、組織だった地下鉄道となった。1850年のアメリカの総人口約2400万人のうち奴隷州の黒人奴隷の人口は約320万人であった。(ちなみに、現在黒人はアメリカ合衆国の総人口の約12%、3千万人以上を占める。)奴隷所有者は、この膨大な人口を相手に逃亡を阻止しようとしていたのである。

> 地下鉄道の活動は明らかにノース・カロライナで発達した。それは、1741年に植民地政府が「逃亡者を宿泊させた者は訴追されるか、25ポンドを支払うか、あるいは、その奴隷の所有者ないし彼の譲渡人に五年間の奉仕をしなければならない」という法案を通過させたからである。
>
> "Underground" activities had evidently developed in North Carolina, for in 1741 the colony passed an act providing that, "Any person harbouring runaway shall be prosecuted and compelled to pay the sum of twenty-five pounds or serve the owner of the slave or his assigns for five years. . . ." (Preston Jr. "Genesis" 149)

奴隷所有者の権利を守ろうとする法律の発効と、地下鉄道の始まりは軌を一にしていて、それはイタチごっこをするようにして膨らんでいったのである。1818年までにはオハイオ川を渡ってくる奴隷の数は増え、明らかに組織だった援助が行われるようになった。このような状況の中で、最も厳しい1850年に制定された法律が、今まで奴隷問題に距離をとっていた善意の人々の心に火をつけたのである。

さて、作品の中でクエーカー教徒の開拓地の主人シメオン・ハリデーと妻のレイチェル・ハリデーのモデルについて、ストウ夫人は『アンクル・トムの小屋の鍵』では、特定することはなかった。しかし、シーバートの『地下鉄道——奴隷から自由へ』のなかにそのモデルとして、一人の名前、リーバイ・コフィンが浮かび上がってくる。その全文を引用する。(下線筆者)

> 地下鉄道の有名な社長リーバイ・コフィンは、その734頁にわたる『回

想録』の中で、青年時代ノース・カロライナ州で、奴隷を北方往きの自由への道に案内するようになって以来、インディアナ東部において20年間、オハイオ州シンシナティ市において15年間働いてきた彼と彼の仲間たちが、南部に展開する北部連邦軍に奴隷の参加が認められるようになり、地下鉄道から解放された時までを物語っている。シメオン・ハリデーは穏やかでしっかりした性格であると描写されているが、リーバイ・コフィンも同じような性格のクエーカー教徒であり、彼がモデルであったかもしれない。それ故に、言うまでもないことだが、彼の自伝は素朴さと誠実さが特徴であり、著者がかかわった地下鉄道の路線にまつわる豊富な情報を提供してくれる。

In his *Remiscences*, a book of 732 pages, Levi Coffin, the reputed president of the Underground Railroad, relates his experiences from the time when he began, as a youth in North Carolina, to direct slaves northward on the path to liberty, till the time when, after twenty years of service in eastern Indiana and fifteen in Cincinnati, Ohio he and his coworkers were relieved by the admission of slaves within the lines of the Union forces in the South. Mr. Coffin was a Quaker of the gentle but firm type depicted by Harriet Beecher Stowe in the character Simeon Halliday, of which he may have been the original. It need scarcely be said, therefore, that his autobiography is characterized by simplicity and candor, and supplies a fund of information in regard to those branches of the Road with which its author was connected. (Siebert 4)

「シメオン・ハリデーは穏やかでしっかりした性格であると描写されているが、リーバイ・コフィンも同じような性格のクエーカー教徒であり、彼がモデルであったかもしれない」、とかなり明確に推理している。リーバイと妻のキャサリンは1826年にファウンテン・シティに来た。そこに約20年間住んでから1847年に、商売の関係でシンシナティに移ることになったが、以後15年間余

「有名な社長」(the reputed pesident) と呼ばれるような働きをした。

> 当時、シンシナティでオハイオ川を渡る逃亡者数が多く逃亡奴隷を援助する要求は増していた。依然として、彼はよく知っていたニューポート経由のルートを使っていた。コフィンの家は大きく、ゆとりがあったので、逃亡者が出入りする動静を隠すにはもってこいだった。
>
> The demands on his time to help fugitive slaves increased because of the heavy traffic crossing the Ohio River at that point. He continued to use the routes he knew so well through Newport. The Coffins operated a large rooming-house which helped conceal the movement of fugitives in and out. (*Levi Coffin House*)

彼と彼の組織はニュー・ポートで約2,000人、シンシナティでは約1,100人の逃亡奴隷を逃がしたといわれている。このような具合であったので、当然「奴隷を逃がすことにかけては有名だったあるクエーカー教徒」(*Uncle Tom's Cabin* 543) と書いたストウ夫人の耳にもコフィンのことは入っていたはずである。ストウ夫人が彼の名前を直接あげることはなかったが、控えめに考えても、先のシーバートの推理のように、リーバイ・コフィンもクエーカー教徒のモデルの一人であるのは間違いない。彼の地下鉄道での活躍を調べてみると、その徹底した努力にその思いを強くする。

4、Levi Coffin の働き

リーバイ・コフィンについては『リーバイ・コフィンの回想録』という彼の自伝的記録に詳しい。その中心は逃亡奴隷が地下鉄道でカナダに逃げる手助けを記録したもので、1820年代の中西部の開拓、そして南北戦争時代を髣髴とさせるものである。しかし、記憶を辿って多くのエピソードに歴史を語らせるが、地下鉄道に関しては存命の人に迷惑がかからないように、名前などそれにかかわった人については分からないようになっている。執筆が南北戦争後間もない頃なので、致し方のないことである。とまれ、逃亡奴隷と地下鉄道に関してな

くてはならない資料である。

リーバイ・コフィンは1798年ノースカロライナ州ニュー・ガーデンの貧しい農家に生まれた。5人の姉と1人の妹にかこまれた1人息子で、21歳まで家の手伝いをした。熱心なクエーカーの家庭であった。一貫した学校教育は受けさせてもらえずに、ほとんど独学で学んだ。一学期補助教員をし、次の学期にはさらに上の学校へ通うというようなことをやった。

1824年幼なじみのキャサリンと結婚する。1825年、結婚した姉たち全員が嫁いでいるインディアナ州に両親が移る。リーバイは学校の運営をまかされていたので、遅れて翌26年にその後を追った。当時のインディアナ州にはノース・カロライナから移住するクエーカー教徒の入植地が沢山あった。彼の入ったウエイン郡、ニューポート（Newport、Wayne county）の町にもクエーカー教徒の大きな入植地が沢山あったが、当時の市街地には20家族しか住んでいなかったという。彼はここで1846年まで20年以上を過ごすことになるが、衣類、金物、乾物、穀物、豚肉の塩漬けなどを扱う雑貨店を開き、毎年商売を拡大し、1836年には亜麻油の工場も始め、大いに繁盛した。

彼はニューポートに着いてからすぐに地下鉄道の仕事をはじめ、信念を持って精力を注いでいた。彼自身「商売がますます大きくなっていったが、私には地下鉄道の仕事が出来ないということはなかった」（“Notwithstanding all this multiplicity of business, I was never too busy to engage in Underground Railroad affairs.”）（107）と言っている。そのあたりの事情は『回想録』に詳しく述べられているが、キリスト教の精神に基づき、強い意志の力をもって事にあたったことが分かる。法を犯すことになるのでしり込みをする隣人に、地下鉄道はキリストの教えに矛盾しないことを説き、彼らを仲間に引き入れた。彼はすぐにリーダーとして活躍し、妻の援助、地域のクエーカーや、メソジスト派の人たちの協力を得て素晴らしい成果を上げた。彼は生涯この仕事に携わるわけだが、献身あるいは努力して遂行する任務というより、人としての当然の道であると受け取っていたようである。

彼の家は、地下鉄道のグランド・セントラル・ステーション、そして、彼の

ことは地下鉄道の社長（president）と称されていたが、これは逃亡奴隷の追手によってつけられたものだという。それは、追い掛けてきた奴隷が彼の手にはいれば消えてしまい、それ以上追い掛けることができなくなったのがその理由であった（712）。

彼がこの仕事に携わっていた30年というもの、逃亡者が来ない週はなく、一年に約100人が、彼の家を訪ねたという。臨場感あるエピソードを一つ紹介する。すこし長いが、素朴な文体の英文もそのまま味わっていただきたい。筆者には、鉄道の用語が微笑ましく感じられる。しかし、いつ来るか分からない汽車を仮眠して待ち、乗客に火を起こし、食べ物を出し、馬の世話をする駅員の作業には頭が下がる。実際、食料、衣類、靴、馬の用意など相当の金がかかり、クエーカー教徒を中心とした募金に頼るなど彼らの努力の一端がうかがえる。なお、公開されているコフィンの家には逃亡奴隷が隠れる屋根裏部屋があったり、馬車の荷台の下に人が隠れるように細工をしたものが、展示してあったり、地下鉄道の生々しい実感が伝わってくる。（付録の写真参照）

> 線路にはいつでも走行指示が出ていて、接続は良く、乗務員は活発で熱心であり、いつも乗客がいた。この不思議な線路には、一週間つづいて乗客を受け取らない日はなかった。そのような一行をいつ何時でも受け取り、相応の世話ができる準備をしておく必要があった。我々は何日の夜に、あるいは夜何時に、ドアを静かに叩く音で眠りから起こされるか分からなかった。その音が地下鉄道の列車の到着を知らせるシグナルだった。機関車は汽笛を鳴らすさないし、不必要な騒音も立てないのだ。私は良くこのシグナルで起こされて、暗闇でとび起き、ドアを開けた。外の寒い雨の中に2頭立ての馬車がいて、逃亡者を、多分その大部分は女と子供だが、乗せているのだった。私は低い声で入るように言う。そして、彼らは私のあとについて、一言もしゃべらずに暗い家の中に入る。誰かが目をこらし、耳をそばだてているかもしれないのだ。全員が安全に中に入ると、私はドアをしっかりと締め、窓を覆い、明かりをつけ、暖かく火を燃やす。この時までに、妻が起

きて彼らに食べ物を用意し、凍えて腹を空かせた逃亡者たちはすぐに心地よくなるのだった。私は列車の乗務員を馬小屋に連れていき、馬の世話をする。多分寒さと雨の中、25 マイルか 30 マイル走ってきたのだろう。逃亡者たちはその夜、火の前の粗末な寝床で眠るのだ。時には、別々の路線で到着した、それまで全く面識がない馬車一杯の乗客どうしが、私達の家で会うことがある。逃亡者の一行の人数は 2 、 3 人から、17 人までさまざまだった。

The roads were always in running order, the connections were good, the conductors active and zealous, and there was no lack of passengers. Seldom a week passed without our receiving passengers by this mysteious road. We found it necessary to be always prepared to receive such company and properly care for them. We knew not what night or what hour of the night we would be roused from slumber by a gentle rap at the door. That was the signal announcing the arrival of a train of the Underground Railroad, for the locomotive did not whistle, nor make any unnecessary noise. I have often been awakened by this signal, and sprang out of bed in the dark and opened the door. Outside in the cold or rain, there would be a two-horse wagon loaded with fugitives, perhaps the greater part of them women and children. I would invite them, in a low tone, to come in, and they would follow me into the darkened house without a word, for we knew not who might be watching and listening. When they were all safely inside and the door fastened, I would cover the windows, strike a light and build a good fire. By this time my wife would be up and preparing victuals for them, and in a short time the cold and hungry fugitives would be made comfortable. I would accompany the conductor of the train to the stable, and care for the horses, that had, perhaps,

> been driven twenty-five or thirty miles that night, through the cold and rain. The fugitives would rest on pallets before the fire the rest of the night. Frequently, wagon-loads of passengers from the diffrent lines have met at our house, having no previous knowledge of each other. The companies varied in number, from two or three fugitives to seventeen. (Coffin 111-12)

クエーカー教団では、自分たちの地下鉄道の助けでカナダに行った逃亡奴隷たちがどのように生活しているかを調べることになり、1844年9月から約2カ月にわたり、リーバイはクエーカーの牧師と一緒に、デトロイト、ウィンザーをはじめ各地をつぶさに見て歩いた。各地で自分が逃がした黒人たちに大歓迎され、再会を楽しんだ。当時は約40,000人余がカナダに移住していて、カナダ政府の援助もあり、自由人として穏やかな生活をしていた。しかし、気候も違い、遅く入った者の中には貧しいものも多くいたので、その後、リーバイたちクエーカー教徒は、カナダにも衣料品などの援助物資も送ったという。リーバイはこの訪問が第一回でこのあと何回か訪れている（Coffin 247-51)。

これまでにリーバイは奴隷労動ではなく自由労働によって生産された綿(freelabor goods）などを扱うようにしていた。1846年秋に、クエーカー教団では自由労働製品を扱う大きな問屋をシンシナティに作ることになり、その運営にあたる人材として、経験者であるリーバイに白羽の矢を立てた。彼は、1847年春にやむなく20年以上住み慣れたニューポートをあとにする。新しい仕事も大変で、奴隷を使わない南部の零細農園の綿を買い付けたり、イギリスのマンチェスターや、奴隷制度を止めた西インド諸島などから仕入れたり、八方手を尽くしたが、自由労働製品を集めるのは大変で、常に品薄であったという(Coffin 271-96)。

シンシナティに移ってからも商売はますます忙しくなったが、彼は地下鉄道の仕事を継続した。シンシナティの地下鉄道の動きが不活発になっていることを知り、組織を建て直した。そして、逃亡奴隷法が成立する1850年になり、地

下鉄道の仕事は前よりもさらに増えて大変になったが、彼はリーダーとしてみんなをひっぱっていった（Coffin 297-98）。

次のような描写がある。「私達が喜んで奴隷の援助をしているということがすぐに知られるようになり、町にやってくる逃亡者は必ず私達に援助を頼むようになった」（"Our willingness to aid the slaves was soon known, and hardly a fugitive came to the city without applying to us for assistance.") (Coffin 299）また、婦人を集めた反奴隷制度裁縫会（Anti-slavery Sewing Society）を作り、彼の家で毎週集まって仕事をした。『回想録』には関係者の名前が出ることはほとんどないのだが、ここには10人の婦人の実名が書かれている。特筆に値すると思うのだが、この裁縫会はそれほどに有名であったのであろう。彼とストウ夫人を結ぶ直接的な接点は出てこないのだが、彼女は50年にシンシナティを発つのであるから、彼のこのような活躍のことは、彼女の耳に入っていたと考えるのが当然であろう。

このあと、南北戦争（1861-65）に突入すると、多くの黒人奴隷の男性が北軍に入隊を許可されたり（contrabandと呼ばれる）、また、無理矢理南軍で働かされたりした。その結果老人、女性、子供がひどい状態に陥ったのでその世話をしたり、負傷兵の世話なども加わってリーバイたちの仕事は地下鉄道以外にも増えた。

戦後、リーバイは、1867年8月パリで開かれた反奴隷制度国際会議（International Anti-Slavery Conference）に西部地区逃亡者援助委員会（Western Freedmen's Aid Commission）の代表として出席した。そして、地下鉄道は急速にその使命を終え、彼はその終焉を宣言することになった。彼の『回想録』は「盛大な賞賛のなか、私は事務所を辞し、地下鉄道の運行を終えると宣言した」（"Amid much applause, I resigned my office and declared the operations of the Underground Rairoad at an end.")（Coffin 712）という文章で静かに締め括られる。

彼の業績や地下鉄道について、シーバートは1896年『地下鉄道 ── 奴隷から自由へ』を書いた。後の世代では、1961年、次の一節で書き起こされる『自由

の線路――地下鉄道の伝説』(*The Liberty Line: The Legend of the Underground Railroad*) を書いたラリー・ギャラ (Larry Gara) などがコフィンと地下鉄道を目の当たりに見せてくれる。

> 1893年のシカゴで開かれたコロンブス世界博覧会に行った何千という入場者が「地下鉄道」と題するチャールズ・T・ウエバーの描いた絵を見た。この劇的な絵には大家族の逃亡者がシンシナティのリーバイ・コフィンの家に到着したときの情景が描かれている。彼が妻や友人たちと一緒に、雪の中、ふるえながら恐怖に怯えている黒人を避難所まで案内している図である。
>
> Thousands who attended the Columbian World's fair in Chicago in 1893 saw a painting by Charles T. Webber entitled "the Underground Railroad"; this dramatic picture showed a large family of fugitives arriving at the home of Levi Coffin of Cincinnati, who, with his wife and friends, was guiding the shivering and frightened Negroes through the snow to shelter. (Gara 1)

1893年のコロンビア世界博覧会は、1492年のコロンブスのアメリカ大陸発見400年を記念して開かれたアメリカ最初の国際博覧会であった。これについては、大井浩二著『ホワイト・シティの幻影―シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』に詳しいが、「地理的・農業的フロンティアが消滅した金メッキ時代に終止符を打つ事件であったと同時に、都市的・産業的フロンティアが登場する革新主義時代の幕開きを予告する祭典であった」(大井16)。アメリカ史の最初の時代の終了を告げる機会であり、黒人は、博覧会は奴隷解放宣言以後に彼らが達成した成果を示すための絶好の機会であると捉えていた。そこでは当然、黒人の扱いについては大いに論争があった(大井85-88)。その中で地下鉄道とリーバイ・コフィンの絵を展示したのは、非常に興味深いものがある。展示のいきさつは分からないが、奴隷制度廃止の歴史に果したコフィンの働きの偉大さが、広く評価されたことは想像に難くない。また、これにより、キリスト教徒が奴隷制度を終わらせたのだという歴史と、奴隷はもういないということを世界に

知らせることになったのは当然であろう。しかし、それから、100年経ってもまだ人種差別は残っていて、その非人間性を訴えつづけなければならないのである。

さらに、興味深いのは、この絵を見た入場者の一人であったシーバート（27才）がこれをきっかけに地下鉄道を研究することになったということである(Gara 1)。このように地下鉄道の研究は、現在でもさまざまに受け継がれている。

5、*Uncle Tom's Cabin* と Toni Morrison の *Beloved*

Uncle Tom's Cabin には非常に興味深い結末が用意されている。34章「四分の一混血の物語」で、白人の父親と奴隷の母の間に生まれたキャシー1/4混血(*quadroon*)は、白人と同じようにして育てられる。しかし、父親は彼女を自由人にする前に死んでしまう。その後、ヘンリーに奴隷として買われ、白人とほとんど同じ皮膚の色をした1/8混血の息子ヘンリーと娘エルシーの二人が生まれた。賭博で負けた（子供たちの父親である）主人のヘンリーは結局キャシーと子供を別々に売ってしまう。やがて、新しい主人スチュアートとの間にも男の子が生まれるが、その子も奴隷としてつらい運命を辿るのなら、この世に生かしておいても仕方がないと考え、2週間目に阿片チンキを飲ませ、殺してしまう。そして、彼女にはその子殺しの後悔の念がいつまでもつきまとうのだった。

> 一年して、私は男の子を生んだの。ああ、あの子！── どんなに愛しかったことか！　あのちびちゃんは、かわいそうなヘンリーにそっくりだった！　だけど、私は決心していた。そう、前からね。つまり、二度と子供なんか育てないってね！　生まれて二週間たつと、私は子供を抱いてキスをして、その子のことを思って泣いた。それから、その子に阿片チンキを飲ませて、胸に抱きしめた。そうしているうちに、子供は眠ったまま死んだの。私はどんなにか嘆き悲しんだことか！私が阿片チンキを飲ませたのは、過失ではなかったなんて、誰が想像し

ただろうか？　でも、それは今私が喜んでいる数少ないことのひとつなのよ。今日に到るまで、後悔なんかしていませんよ。少なくとも、あの子は苦しみから逃れたんですから。私があのかわいそうな子に与えてやれるもので、死にまさるものがあっただろうか？

In the course of a year, I had a son born. O, that child!— how I loved it! How just like my poor Henry the little thing looked! But I had made up my mind,— yes, I had. I would never again let a child live to grow up! I took the little fellow in my arms, when he was two weeks old, and kissed him, and cried over him; and then I gave him laudanum, and held him close to my bosom, while he slept to death. How I mourned and cried over it! and who ever dreamed that it was anything but a mistake, that had made me give it the laudanum? but it's one of the few things that I'm glad of, now. I am not sorry, to this day; he, at least, is out of pain. what better than death could I give him, poor child! (451)

キャシーはこうして子殺しの罪を背負って生きていくのだが、この話は42章、43章に到り思いもしない形で、あっけなく幕が引かれる。

42章「本当の怪談」で、逃亡中のキャシーと、ド・トウ夫人と名のるフランス人、それに、エライザがいたシェルビー農園の跡取りであるジョージ・シェルビーの三人がミシシッピー川の船上で偶然に出会う。

実はド・トウ夫人はもともと黒人奴隷であり、幼い頃南部に売られたこと、そして今、弟のジョージ・ハリスの消息をたずねていることを話す。すると、シェルビーはその男をよく知っていると言う。シェルビーによると、その男は父親の農場にいたエライザという奴隷と結婚し、現在はカナダに逃亡していること、そして、その女奴隷は白人とほとんど見分けがつかず、八、九歳の時法外な値段で父親が買ったことなどを教える。それを聞いていたキャシーは失神してしまう。売買証明書にあった商人の名からエライザが自分の娘だ、と分かったのだ。

このような伏線があり、第43章「結末」は、ジョージ・ハリスとエライザがカナダに逃亡した5年後が舞台となっている。連れていった男の子の他にこの家族には、娘が新しく加わり幸せに暮らしていた。そこに、キャシーとド・トウ夫人が訪れる。ド・トウ夫人というのは、実は遺産の相続により金持ちになっているジョージ・ハリスの姉、エミリーであった。

娘と孫に会えてキャシーの悩みも消え、エミリーも弟に会うことができて、物語は大団円となるのだ。この解決法が余りにも安易だという印象を与える。さらに、ジョージ・ハリスはみんなを連れて、フランスに行き、最後はアフリカで自分の教育の成果を持って、遅れているアフリカのために尽くすことになる。

この結末には二つの問題点がある。一つは、奴隷として新大陸に連れてこられた黒人をどのような形であるべき姿に戻すのかという命題である。この点に関しては、この稿では問題としない。ただ、当時、黒人をどうするかということでさまざまな議論がなされていたが、ストウ夫人は、逃亡奴隷法施行のあとで、親交のあったアップハム教授（Professor Upham）が植民地主義者の立場を信奉していて、「黒人に教育を与え、黒人を買い戻し、アフリカに住ませるべきだという信念を持っていた」（“he believed the slaves should be educated, purchased, and then send back to Africa.”）（Joan D. Hedrick 205）ので、次のように批判している。

> 『そういうことが行われるまで、彼はどんなことにも口を開かず、子猫ちゃんといって猫を撫でながら、忍耐するんだわ── そうやってあらゆる偏見を和らげ、あらゆる煽動を避けてるんです』とハリエットはかっかと怒った。
>
> “[U]ntil that is done he is for bearing every thing in silence & stroking & saying ‘pussy pussy’── so as to allay all prejudice & avoid all agitation,” Harriet fumed. (Hedrick 205)

この批判は必ずしも黒人奴隷の処遇に対してではなく、奴隷制が解決するまで手をこまねいていることへの怒りが中心であろう。やはり、彼女は進歩した

文明の中に生きている者として、未開人を教化するという、考えを持っていたようある。白人という支配者側の発想であり、それは次の問題へと繋がっている。

それは、エライザと言う名前になっている実の娘エルシーと、彼女の子供の時とそっくりの孫に会うだけで、キャシーの悩みも、子殺しの罪もすっかり消えてしまっているように読めることである。

> 二、三日すると、キャシーはひどく変わってしまって、読者が会っても見分けられないほどになった。……聖書をいつも読んでいるせいで、エライザの固い信仰は、傷つき疲れはてた母親の心のためによい導き手となった。キャシーは、たちまち心の底から良い影響をことごとく受けいれ、熱心なやさしいキリスト教徒になった。
>
> And, indeed, in two or three days, such a change has passed over cassy, that our readers would scarcely know her . . . . Eliza's steady, consistent piety, regulated by the guide for the shattered and wearied mind of her mother. Cassy yielded at once, and with her whole soul, to every good influence, and became a devout and tender Christian. (530)

キャシーが、二、三日で「熱心なやさしいキリスト教徒」になり悩みも消えた、というのでは、あまりに白人キリスト教徒のご都合主義そのものではないだろうか。くびきにつながれていた黒人奴隷の悲劇の真実をストウ夫人は全く分かっていない、と批判されても仕方がない。

これに反して、「はじめに」で触れたように、トニ・モリスンの『ビラヴィド』では逃亡奴隷のセスがキャシーと同じように我が子を殺して、それを狂気に至るまで懊悩しつづけるのである。まさしく、キャシーの苦悩や罪をセスは問いつづけるのである。

セスは三人の子供を「地下鉄道」に託し、自らも逃亡を敢行し成功する。しかし、一カ月も経たないうちに追手に見つかり、この理不尽な世に生きながらえさせるよりは死なせたほうがよい、と我が子を殺してしまうのだ。夫婦が、

母子が、家族が一緒に住めないという非人間的仕打ち、特に自分の生んだ子と離されるという母親の悲劇。これが、我が子を殺すというさらに大きな悲劇の引き金になっているのだ。セスがこの子を生んだのは1855年、逃亡奴隷法の下にあった時代が背景である。子殺しの箇所を引用する。

> 中には、二人の男の子が、おが屑と泥にまみれて血を流していた。その横に、クロンボの女が血だらけの子供を片手で胸に抱き、もう一方の手で乳飲み子の踵を掴んで立っていた。女は追手には目もくれなかった。赤ん坊を振り回し壁板に叩きつけようとしたが、あたらず、もう一度ぶつけようとした。その時、どこからともなく ── 追手がこの光景に目を奪われていた一瞬の間に ── クロンボの爺が、まだ猫みたいな声を出しながら背後のドアから走り込んできて、母親が弧を描いて振り回している赤ん坊をひったくった。
>
> Inside, two boys bled in the sawdust and dirt at the feet of a nigger woman holding a blood-soaked child to her chest with one hand and an infant by the heels in the other. She did not look at them; she simply swung the baby toward the wall planks, missed and tried to connect a second time, when out of nowhere ── in the ticking time the men spent staring at what there was to stare at ── the old nigger boy, still mewing, ran through the door behind them and snatched the baby from the arch of its mother's swing. (149)

このときのセスの気持ちは誰にも分からない。多分、自分が何をやっているのかすらもよく分からないのではないか。追いつめられた母親の狂気である。最愛のわが子を己の手で殺したのだ。墓に刻んだ銘は「愛されしもの」(Beloved)である。そして、18年後、不思議な女がどこからともなく現れ、昔自分を置き去りにしたと言ってセスを責め、際限なく愛と奉仕を要求して、彼女を狂気と破滅に追い詰めていく。これは、己が罪を責めることによって現れた幻、亡霊であり、狂気と破滅によってしかセスはその罪を償い切れないのだ。それほどにセスにとって幼子を殺すことは、自らの命をかけた行為であったの

だ。これは、聖母マリアに代表される最も崇高な母親の愛情の裏返しの表現である。

ここに、おなじ人間である白人が黒人を奴隷として徹底的に虐げた歴史の悲劇がある。そして、『ビラヴィド』に描かれる真実はその苦しみを体験した人々の物語であり、ビラヴィドという少女は献辞に書かれている「六千万有余の人々」(“Sixty Million and more”) すべての怨念を背負っているのだ。

セスの住む 124 番地も地下鉄道の連絡所であったとされる。それに、セスの子殺しは実際の事件がモデルであるらしい。『ブラック・ブック』(*The Black Book* 1974) に 1856 年 2 月 12 日にオハイオ州、シンシナティ市フェアマウント神学校の牧師 P.S. Bassett が “A Visit to the Slave Mother Who Killed Her Child” という記事を載せている。そこには実子を殺した逃亡奴隷を獄中に面接に行ったときの様子が描かれている (10)。その母親の状況が『ビラヴィド』とよく似ているので、トニ・モリスンがこれに発想を得たのではないかと言われている。しかし、当時、母親が子供と引き離されるのは日常茶飯事だったのであるから、同様の子殺し事件が他にもあって、口の端に上っていたのかもしれない。

ストウ夫人はこの子殺しの事件を加害者側の良きサマリア人として取り上げ、精いっぱいの努力をし、その解決をも見通そうとした。その結果南北戦争を通して、奴隷解放の実をあげた。しかし、彼女の感じた苦痛は黒人奴隷たちの苦痛の比ではないであろう。先にあげた *The Black Book* には、見るに耐えないリンチの写真が何枚か載せられている。首をつられて、ぶら下がっている黒人たち、串に通されてバーベキューよろしく火で焼かれている黒こげになった黒人、そしてそれを見て意気揚々と笑顔で記念写真におさまっている白人たち。これも狂気である。そのすべてが奴隷解放によって終わったはずであった。しかし、それはさまざまな形で継続しているのである。

そして、『アンクルトムの小屋』出版の 135 年後、同じ問題を語る被害者側の語り部が声を上げた。モリスンは、忘れてはいけない貶められた者の鎮魂歌、

語り継がれるべき歴史を語る。しかしそれは裏を返せば、すっかり忘れ去り、語り継がれるべきでない歴史でもあるのだ。過酷な歴史を語り継がなくていいような社会になれば、全く必要のないことであるのだろうが、この不完全な人の世ではいつまたそのようなことが繰り返されるか分からないのである。

モリスンは、この繰り返す歴史を終わらせるために、癒しの儀式（“fixing ceremony”）を用意した。これは直接的にはセスの悲しみを終わらせるためのものであるが、ここから人種の確執を抜ける一つの方向性が見出される。

セスの脳裏では祭司の声がしずかに響く、「置くんだ、セス。剣と楯を。置きな。置きな。両方とも。川の岸に置きなさい。剣と楯を。戦うことはもう考えなくていいんだ。すべての不幸を下ろしてしまいなさい。剣と楯を」（“Lay em down, Sethe. Sword and shield. Down. Down. Both of em down. Down by the riverside. Sword and shield. Don't study war no more. Lay all that mess down. Sword and shield.”）（86）その静かな声に諭されて、セスは武器をおく。「悲惨、後悔、遺恨、傷心に立ち向かうために用いた重い刃の数々を、下では澄んだ水が激しく流れる土手の上に、一つまた一つと置いた」（“Her heavy knives of defense against misery, regret, gall and hurt, she placed one by one on a bank where clear water rushed on below.”）（86）こうして、セスの過去の亡霊との戦いは終わる。その戦いはどうしようもなく悲惨であったが、癒しの儀式はその苦しみを終わらせる。トニ・モリスンはそれ以上は書かない。説明しなくていいのだとすら言っている。彼女によると、現在、アフリカン・アメリカンは以前とは違った小説を必要としていると言う。長い間、黒人を癒してきた音楽のように、あるいは、親が子に語り伝えた古典や神話のように、小説は新しい情報を公にする必要があるのだ、と言う（“Rootedness” 340）。以下の引用のように、それは語りであり、政治ではない。

> それ［小説］は美しく、力強くなければならないが、それはまた「務め」を果たさなくてはならない。それには人を向上させる何かがなければならない。ドアーを開けたり、道を示す何かがなければならない。

どんな諍いなのか、何が問題なのかが示されていなくてはならない。しかし、それは事例研究でも処方箋でもないのだから、それによって問題を解決する必要はないのだ。

It [the novel] should be beautiful, and powerful, but it should also work. It should have something in it that enlightens; something in it that opens the door and points the way. Something in it that suggests what the conflicts are, what the problems are. But it need not solve those problems because it is not case study, it is not a recipe. ("Rootedness" 341)

このキャサリンと、セスの描き方に見られるようにように、ストウ夫人とトニ・モリスンの姿勢にはかなりの隔たりがある。『アンクルトムの小屋』が世に出て『ビラヴィド』に到る135年間に、黒人奴隷問題は人種差別問題に質的に変化し、それが原因となって、アメリカはその分だけ多民族国家としての方向に歩を進めた、と言える。アフリカ系アメリカ人にとって祖国は紛れもなく合衆国であり、その紛れもなき一員としてアメリカに関わっていかなければならないのである。アメリカ以外に帰るべき祖国はないのだから、全構成員の完全な尊厳、自由、平等が求められている。デービット・ローレンス(David Lawrence) が言う「忘れてはならない過去を忘れる危険と、現在を呑み込むと脅す過去を覚えている危険との間で危なっかしい均衡を保っている行為」("a precarious balancing act between the danger of forgetting a past that should not be forgotten and of remembering a past that threatens to engulf the present.") (244)が成熟した社会では求められているのである。「これは語り継がれるべき物語ではない」("This is not a story to pass on.") (275) という『ビラヴィド』の最後で繰り返されるフレーズが重たく読者にのしかかる。セスを狂気に追いつめるこの記憶をもう二度と辿る必要のない世界を創りたい、というのが『ビラヴィド』のメッセージであり、トニ・モリスンの叫びである。

おわりに

エドマンド・ウイルソン（Edmund Wilson 1895-1972）が1962年に出版した『愛国の血糊 ── 南北戦争の記録とアメリカの精神』（*Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*）のハリエット・ビーチャー・ストウの章に次のような一節がある。

> 地域的偏見のせいで、この作品（『アンクルトムの小屋』）が学校では、ニューイングランドの古典のようには読まれることはなかったし、家庭からその姿を消してしまうことすらあった。1900年の初めには、『アンクルトムの小屋』の内容について明確な理解をしている若者はほとんどいなかったと言えるだろう。実際、合衆国では、この本を目にすることさえないままに大人になることもあったのである。そのせいで、大人になってから『アンクルトム』に触れると、はっと息を飲むような経験をすることになる。想像していたよりもはるかに大きな印象を与える作品なのである。
>
> In the meantime, on account of sectional feeling, the book could not be read in schools as the New England classics were, and it even disappeared from the home. It may be said that by the early nineteen-hundreds few young people had any at all clear idea of what *Uncle Tom's Cabin* contained. One could in fact grow up in the United States without ever having seen a copy. To expose oneself in maturity to *Uncle Tom* may therefore prove a startling experience. It is a much more impressive work than one has ever been allowed to suspect. (4-5)

日本でも、『アンクルトムの小屋』は小さいときに学童用に書きなおされた版で読んで、それで終わり、ということが多いのでウイルソンの言葉に全面的に頷く。しかし、文学作品の鑑賞としてよりは、人間と文明の葛藤を信仰に裏打

ちされた圧倒的な力で訴える歴史、思想の書として読むに値するものである。トニ・モリスンなど現代にも受け継がれる永遠のテーマを持っていて、これからも、決して記憶を呼び起こしたくはないつらい歴史が語られているが、『ビラヴィド』とともに必ずゆっくりと読み継がれていくべき古典であろう。

付録、現在のリーバイ・コフィンの家

インディアナ州ウエイン郡、ファウンテン・シティ（以前のニュー・ポートで 1878 年に町名が変更された）にはリーバイ・コフィンが 1839-47 年のあいだ住んでいたレンガ造りの家が National Historic Landmark として保存されている。彼は終の住処と考えて作ったものであるが、クエーカー教団の方針で 1847 年シンシナティに移つることになり、売却した。

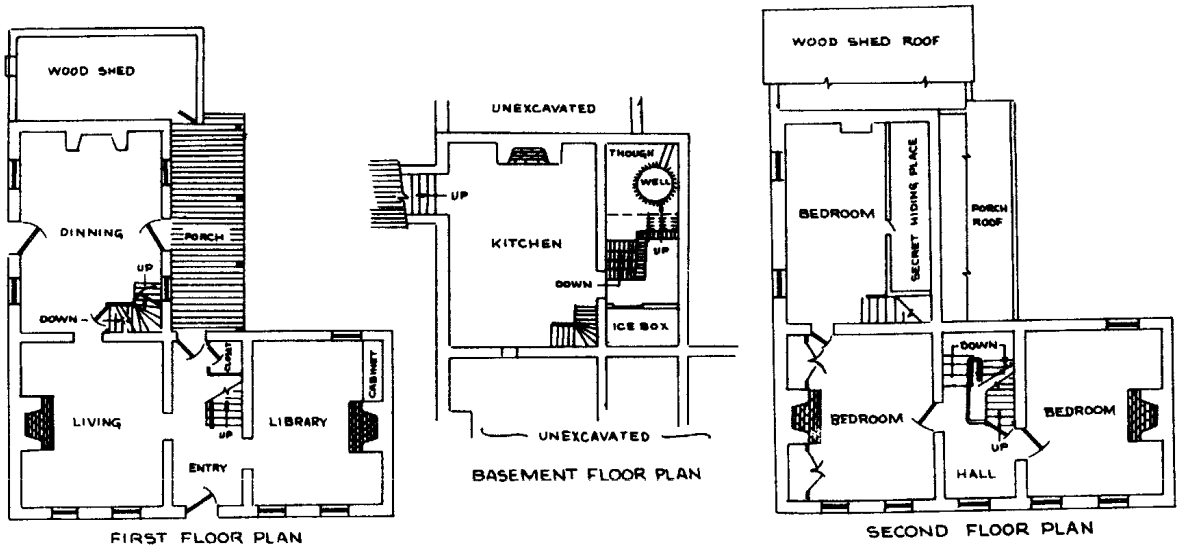
1967 年インディアナ州が買い取り、リーバイがシンシナティに移ってから旅館になっていた家を、歴史協会が復元改修にあたった。1969 年一般公開を開始し、ボランティア組織 the Levi Coffin House Association (Fountain City, Indiana 47341)が運営にあたっている。所在地：Mill Street and U.S. 27（元の Main Cross Street）の南西角。

ニューポートからの地下鉄道主要幹線は次の三ルートであるという（Coffin House n.p.)。

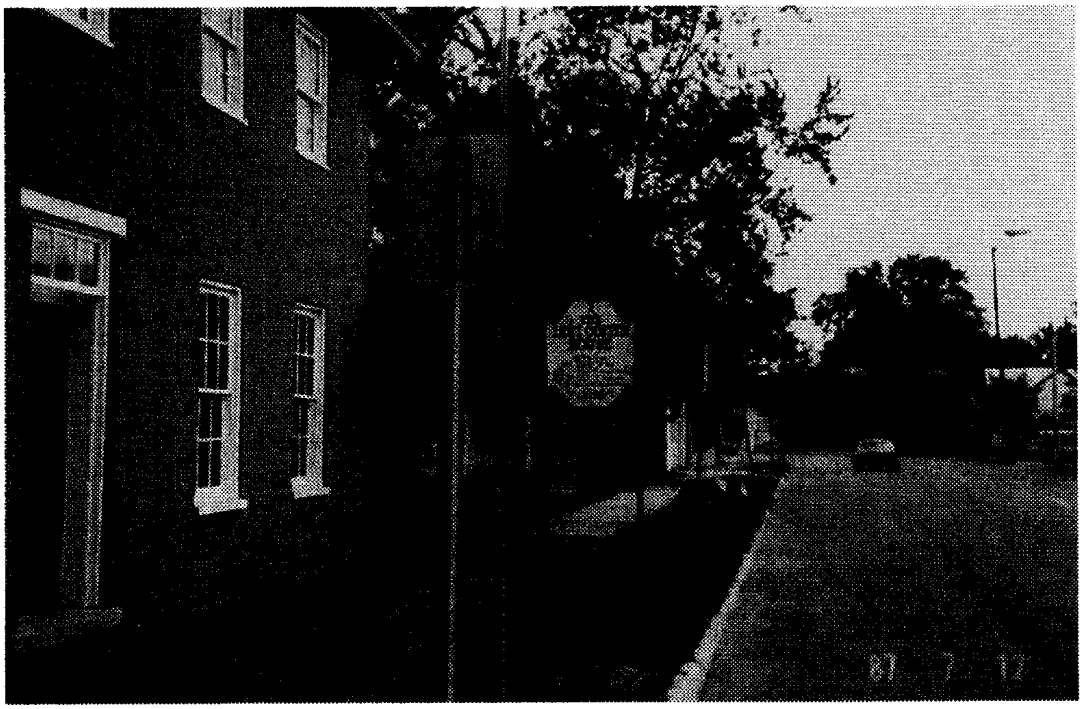
1、北東に向かう　Ohio 州 Greenville を経て Sandusky からエリー湖をボートで Michigan 洲 Detroit の東に位置するカナダの Ontario 州に至る。

2、北に向かう　Indiana 州 Fort Wayne, から Michigan 州 Adrian に至る

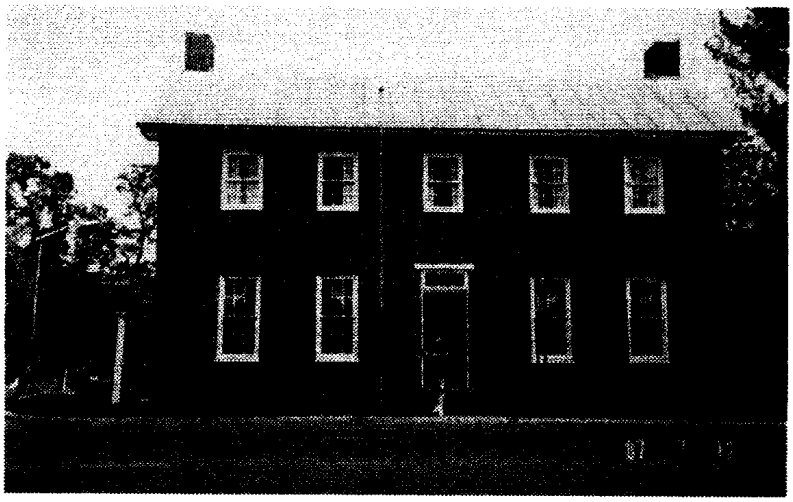
3、北西に向かう　Cabin Creek（Randolph County の南西にある自由になった奴隷の入植地）を通る。Indiana 州 Grant County, Michigan 州 Battle Creek から真東に向い Detroit River を渡りカナダ Ontario 州 Amherstburg に至る。



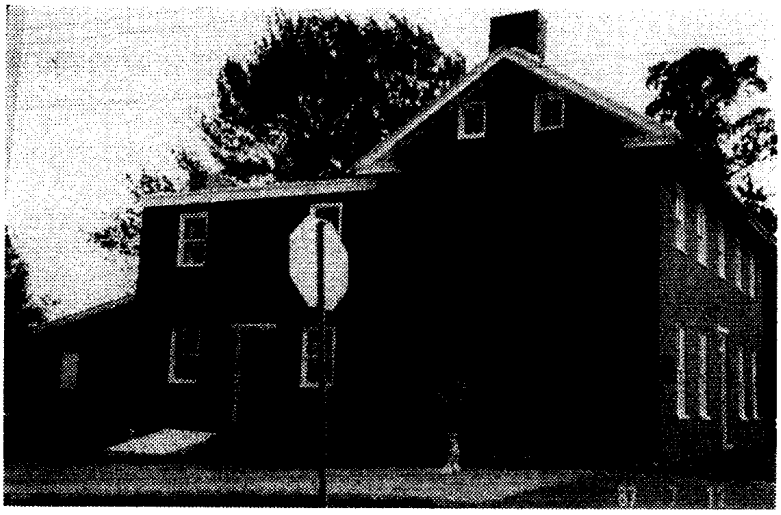
「リーバイ・コフィンの家の平面図」



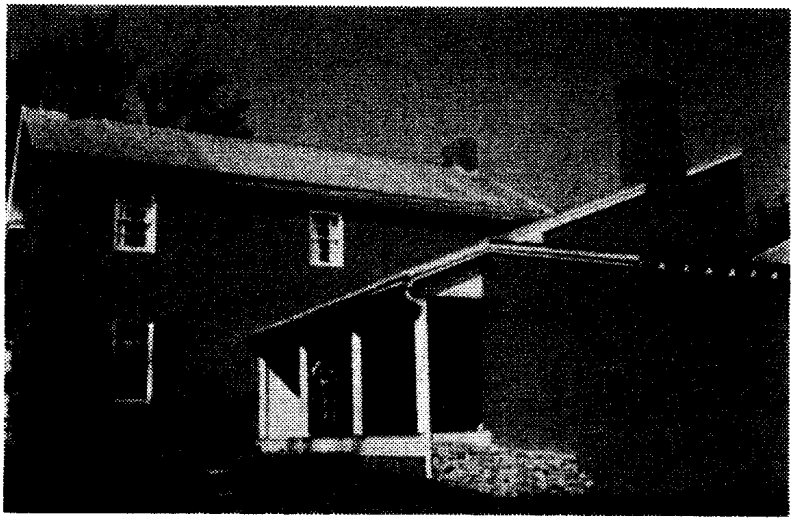
U.S. ハイウェイ 27 に面したリーバイ・コフィンの家
写真：＊印以外は筆者撮影



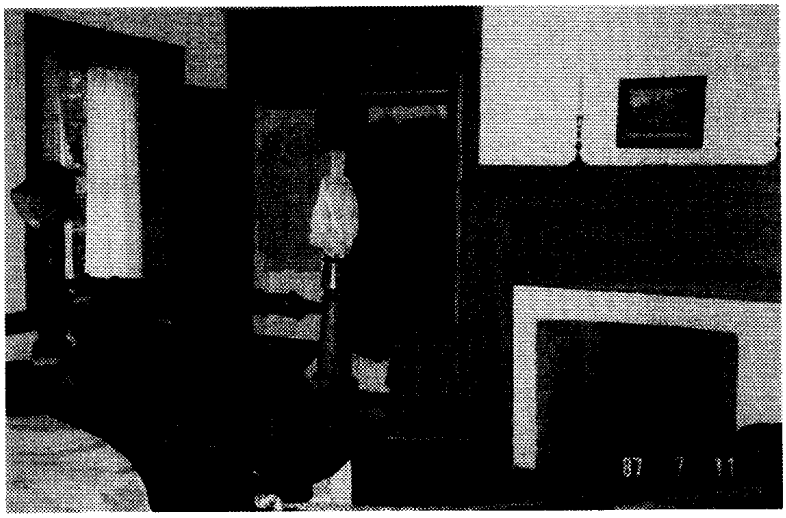
正面から



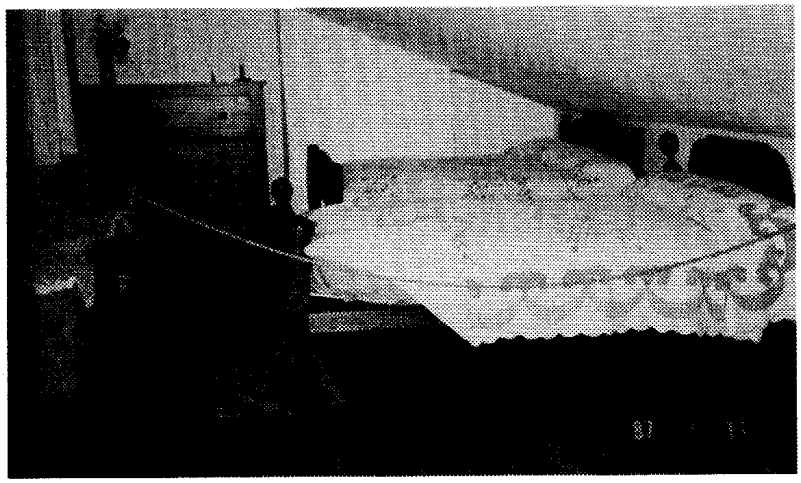
西側、ドアは食堂に入る裏口



裏より*

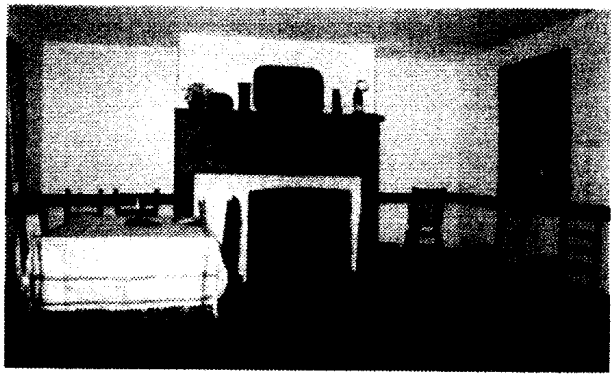


東側寝室

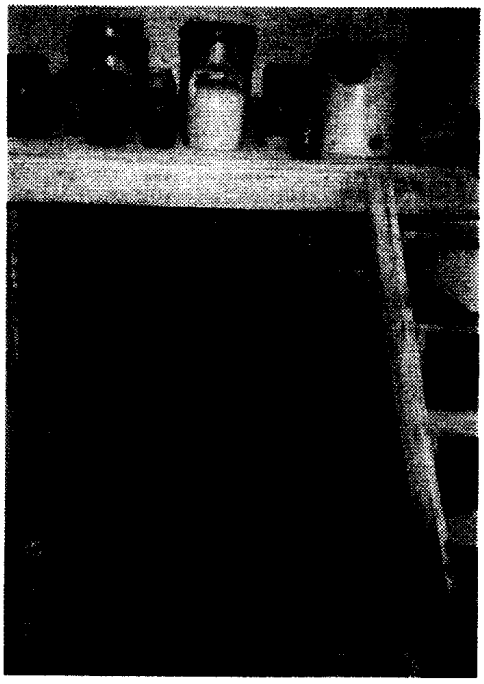


お手伝の寝室、ベッドの頭側、
天井の低い方は隠し部屋へ続くドアがある

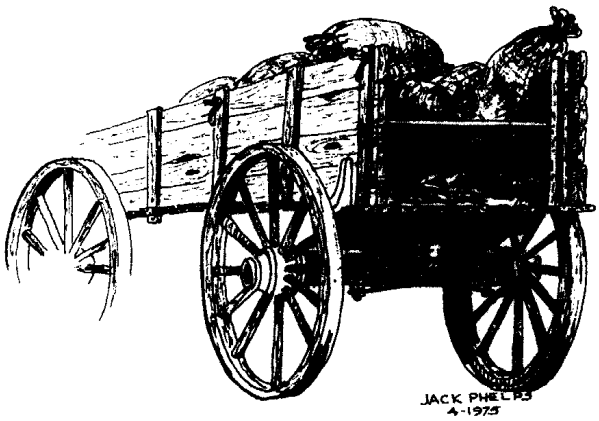
地下室にある台所
地元のボランティアによるガイド



一階にある食堂*



台所よりも、もう半層低く作られている井戸、反対側に氷室がある



逃亡者を隠すように二重の底板になっている古い馬車

TO BE SOLD & LET

BY PUBLIC AUCTION,

On MONDAY the 18th of MAY, 1829,

UNDER THE TREES.

FOR SALE,

THE THREE FOLLOWING

SLAVES,

VIZ.

HANNIBAL, about 30 Years old, an excellent House Servant, of Good Character.
WILLIAM, about 35 Years old, a Labourer.
NANCY, an excellent House Servant and Nurse.

The MEN Belonging to "LEECH'S" Estate and the WOMAN to Mrs. D. SMIT.

TO BE LET,

On the usual conditions of the Hirer finding them in Food, Clothing and Medical Attendance,

THE FOLLOWING

MALE and FEMALE

SLAVES,

OF GOOD CHARACTERS,

ROBERT BAGLEY, about 20 Years old, a good House Servant.
WILLIAM BAGLEY, about 18 Years old, a Labourer.
JOHN ARMS, about 18 Years old.
JACK ANTONIA, about 40 Years old, a Labourer.
PHILIP, an Excellent Fisherman.
HARRY, about 27 Years old, a good House Servant.
LUCY, a Young Woman of good Character, used to HouseWork and the Nursery.
ELIZA, an Excellent Washerwoman.
CLARA, an Excellent Washerwoman.
FANNY, about 14 Years old, House Servant.
SARAH, about 14 Years old, House Servant.

Also for Sale, at Eleven o'Clock,

Fine Rice, Gram, Paddy, Books, Muslins,
Needles, Pins, Ribbons, &c. &c.

AT ONE O'CLOCK, THAT CELEBRATED ENGLISH HORSE

BLUCHER,

ADDISON PRINTER GOVERNMENT OFFICE.

コッフィンの家の売店で売っている奴隷のオークションのポースターの複製

Notes

1・1898年出版のこの本の扉には、まるで広告文のような情報が載っているので、書名は最初の部分でカットしたが、全体は以下のようになっている。

REMINISCENCES

OF

LEVI COFFIN,

The Reputed President of the Underground Railroad;

BEING

A BRIEF HISTORY OF THE LABORS OF A LIFETIME IN BEHALF OF THE SLAVE, WITH THE STORIES OF NUMEROUS FUGITIVES, WHO GAINED THEIR FREEDOM THROUGH HIS INSTRUMENTALITY, AND MANY OTHER INCIDENTS. WITH AN APPENDIX.

THIRD EDITION.

CINCINNATI:
THE ROBERT CLARKE COMPANY.
1898.

2・1854発行のこの本も注1と同じように扉の部分を掲載する。

THE KEY

TO

UNCLE TOM'S CABIN;

PRESENTING

THE ORIGINAL FACTS AND DOCUMENTS UPON WHICH
THE STORY IS FOUNDED,

TOGETHER WITH

CORROBORATIVE STATEMENTS

VERIFYING THE TRUTH OF THE WORK.

BY

HARRIET BEECHER STOWE,

AUTHOR OF "UNCLE TOM'S CABIN."

BOSTON:
JOHN P. JEWETT AND COMPANY.
CLEVELAND, OHIO:
JEWETT, PROCTOR, AND WORTHINGTON.
1854.

Works Cited

Arnold, Edward F. "Underground Railroad in Northwest Ohio." *Journal of Negro History* 17 (1932): 413.

Bassett, P. S. "A Visit to the Slave Mother Who Killed Her Child." *The Black Book*. Ed. Middleton A. Harris, Morris Levitt, Roger Furman and Ernrst Smith. New York: Random House, 1974. 10.

Coffin, Levi. *Reminiscences of Levi Coffin*. Cincinnati: Robert Clarke Company, 1898. New York: Arno and New York Times, 1968.

Emerson, Ralph Waldo. *Miscellanies*. 1904. New York: AMS, 1968.

Gara, Larry. *The Liberty Line. The Legend of the Underground Railroad*. N.p.: U of Kentucky P, 1961.

Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford UP, 1994.

Lawrence, David. "Fleshly Ghosts and Ghostly Flesh: The Word and the Body in Beloved." *Toni Morrison's Fiction: Contemporary Criticism*. Ed. David L. Middleton. New York: Garland, 1997. 244.

Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Knopf, 1993.

---. "Rootedness: The Ancestor as Foundation." *Black Women Writers (1950-1980)*. Ed. Mari Evans. New York: Doubleday, 1983. 341.

Preston, Jr. E. Delorus. "Genesis of the Underground Railroad." *Journal of Negro History* 18 (1933): 149.

---. "The Underground Railroad in Northwest Ohio." *Journal of Negro History* 17 (1932): 412.

Siebert, Wilbur H. *The Underground Railroad: From Slavery to Freedom*. 1898. New York: Arno and New York Times, 1968.

Stowe, Charles Edward. *Life of Harriet Beecher Stowe: Completed from*

Her Letters and Journals. London: Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, 1889.

Stowe, Harriet Beecher. *The Key to* Uncle Tom's Cabin. 1854. New York: Arno and New York Times, 1968.

---. *Uncle Tom's Cabin or Life among the Lowly*. New York: Random House, 1938.

Thoreau, Henry David. *Cape Cod and Miscellanies*. Ed. H. E. Scudder et al. The Writings of Henry David Toreau IV. 1906. New York: AMS, 1968.

---. "Civil Disobedience." *Cape Cod and Miscellanies*. 356-78.

---. "A Plea for Captain John Brown." *Cape Cod and Miscellanies*. 409-40.

---. "Slavery in Massachusetts." *Cape Cod and Miscellanies*. 388-408.

Wison, Edmund. *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*. 1962. New York: Farrar, 1977.

The Levi Coffin House Association. *The Levi Coffin House*. Fountain City, Indiana: n.p, n.d.

荒このみ『黒人のアメリカ ── 誕生の物語』ちくま新書 137，東京，筑摩書房，1997.

大井浩二『ホワイト・シティの幻影—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』東京，研究社，1993.